第 38 回講演会＜2016 年 5 月 23 日開催＞

文化、つながり、そして、コミュニケーション
―文化的価値観におけるアナログ的な習得と関係面

ジョン・コンドン（和訳＝桝本智子）

■講演者……ジョン・コンドン（米・ニューメキシコ大学名誉教授）
■司会……桝本智子（本学国際コミュニケーション学科教授、グローバル・コミュニケーション研究所副所長）

文化、コミュニケーション、そして、異文化コミュニケーションについて話をするとき、私たちは空間の比喩を使って話をします。「Aという場所に住んでいる」とか「Aを離れてBという場所に行く」、「AとBの文化の間にいる」、「二つの文化の架け橋になろうとする」などと言います。つまり、文化というものが境界線のある場所のように話をしているのです。このことは私たちが文化を自分達自身の中に持っているということを無視しています。つまり、私たちは成長するにつれて周りの文化を自分の内側に取り入れ、新しい環境や状況、そして、社会との関係に自分達を適応させていっているのです。

今日は文化の「時」の部分、異なる時間の見方について、まず、何百万年にもわたる時間を、そして、分単位、さらに秒単位で計れるものについて次のような側面から考えていきたいと思います。

ジョン・コンドン先生

- 進化の側面
- 習得の側面
- 教育（学校、生徒／教師）の側面
- 技術の側面（技術の文化への影響）

「進化」について

人類は何百万年をかけて我々が言うホモサピエンス、考える“ 人（ホモ）”、に進化してきました。人類として進化するにつれて、動物の中で人間は最も依存する生きものになりました。最近、私はアメリカの自宅で子犬を飼い始めました。その子犬の生活は東京に住んでいるとすれば、私が住んでいる田舎の家の生活とはかなり違ったものになったでしょう。子犬が生き延びるために、また、他の動物が生きるために知るべきことを、彼らは教えられる必要がないのです。これは「本能」と呼ばれるものです。（桝本先生は日本の都市部にいる盲導犬は、携帯をしながら歩いている人々を避けることは、今までに無い人間の行動なので戸惑っていると言っていました。）

私たちは一歳ぐらいになるまで歩行というものをしません。生まれる前から言葉をしゃべる準備をしているとはいえ、両親が子供の最初の言葉として捉えるものを話すまでに数ヶ月がかかります。私たちの脳は２０歳ぐらいになるまで完全には発達しません。私た

ちはこの世界で生きていくのに必要なことが本能的に備わっておらず、最も依存的な生きものなのです。むしろ、生きるすべは内在しているのではなく外の世界にある、即ち、文化にあるのです。

人類の進化の歴史は生物学的な部分にあると言えるでしょう。人間には「三つの脳」があります。または、私たちの脳は前人類の起源に由来する部分も含んでいると言えるでしょう。

人間は「爬虫類脳」、つまり、トカゲや蛇やその他の爬虫類と共通する脳の部分があります。その部分はテリトリーを守る強い感覚という特徴があります。しかし、他にも人類の進化の過程で「家」を作るとか、道を造るなど３０以上の行動がこの部分に由来しています。学習する必要はないものです。それは本能であり、「生きる脳」と言われているもので、行動は基本的に刺激への反応です。（私の友人である故 E.T. ホールは官僚制というのは爬虫類脳により支配されていると言っていたものです。また他の人は、人種差別は幼稚な反射作用に導かれたものであるとも言っています。）

ずいぶん後に、人間の脳は「大脳辺縁系」または、「大脳辺縁群」を発達させました。これは、感じる能力、世界を感じる多様な方法に連結し、そして、感覚により世界を認識する能力を高めるので、一般的には「感じる脳」として知られています。異文化間コミュニケーションの分野を始めたと言われるE.T. ホールは、この部分は最も過小評価をされていると言っています。なぜなら、私たちが論理的な言語のメッセージを理解しようとしているとき、教えられたことではなく自然と身についた、この情緒脳が伝えようとしている感情のメッセージの重要性を無視しがちだからです。ホールにとっては、「知る」ことに最も大切な道具は人間の体なのです。

大脳皮質、または、前脳部は脳において最

講師を紹介する司会の桝本先生

も大きな部分です。そして、最も新しく発達した部分です。「考える脳」として知られるこの部分は、言語や数学、芸術などあらゆる記号のシステム――通常「文化」と考えている大抵のことを可能にしています。それは教育を可能にし、学習と学習しないことを可能にします。言葉を通して私たちは他の人の神経システムを利用することができ、記号的に彼らの経験を共有することができるのです。

記号創造、記号共有の結果である技術は、私たちの文化環境を変える可能性があります。技術は他人に頼ることに重きをそれほど置かず、技術自体に私たちが依存します。私が１９７０年代に日本に住んでいたときは誰かが「留守番をする」ことが大変重要でしたが、今日ではそれほどではありません。消費社会における応用技術はスピードを重視します。ＳＵＩＣＡは人間が切符を切っていた当時よりも、もっと効果的です。それゆえに都市部での生活速度はますます速くなっています。そして、「場所としての文化」においては、判断は遅いのか早いのかに基づいてされるでしょう。通常、誰かが私たちのスピードで動いていないと、彼らは遅すぎるか早すぎるかという判断がなされるのです。

ここで、文化とコミュニケーションの別の側面、時間について話をしましょう。私は先住民文化とコミュニティーが豊かなアメリカ

の地域に住んでいます。アメリカにいる先住民の部族の中でも最も大きな部族がナバホ族です。(今日では“デネ”と呼ばれることを好みます。) ナバホの人々にとって手は意味のあるシンボルでもあるのです。親指は自分を表します。人差し指は母親を意味します。中指は父親、そして薬指は母方の父親、そして小指は父方の父親です。ナバホ族、デネの人々が握手をする時は、相手の手をぎゅっと握らずにそっと握ります。手を握る時はその手を相手の家族のように扱います。ですので、三世代に揃って会うようなものなのです。そこには一種の真実があります。あなたのお母さんとお父さんはあなたに影響を与え、その親達はあなたの両親に影響を与え、ある意味、私たちが他の人に出会う時はすべての家族を連れて来ているようなものなのです。

「習得」と「教育」について

「言葉」というものは人間の特性を表すものであり、スピーチの能力であり、また、シンボルシステムの代替手段にもなり得ます。私たちは第一言語を習得し、即ち、意識的な努力をすることなく耳にする言語を身につけるのです。新生児は数千もの音を聞き、発する能力があります。それらの多くはどこかで話されている言語においては意味のある音です。しかし、私たちが家族や周囲の人々から聞く音、つまり「我々の言語」において聞いたり表現したりする必要な音というのはほんの一握りの音でしかありません。私たちが聞かない音や、めったに耳にすることのない音はすぐに聞こえなくなります。また、それを表現するのが難しくなってしまいます。外国語学習においての経験は違ったものです。そこでは、先生と学生とともに、間違いを直しながら「学ぶ」ということがたいてい必要になってくる過程があります。

内面化された文化的な見方や解釈、そして行動というのは習得されるものです。第一言語の習得は文化習得の良いモデルです。すでに内面化されているので「私の文化」を他の人に説明するのが難しいのです。文化は学習するものではないからです。同様に日本人学生は英語を母語とする学生よりも、英語の文法をちゃんと説明できるのです。

他にも特記すべき特徴があります。英国の文化人類学者であるグレゴリー・ベイトソンは人間のコミュニケーションには「関係面」と「内容面」の両方があるという考え方を紹介しました。ほとんどの動物と人間・動物のコミュニケーションの大部分は、関係性に関するもの、つまり、言葉やもっと効果的には非言語的に表現された感情が主体となっています。言葉でのメッセージは何らかのトピックについての「内容」です。しかし、もし、あなたがクラスの誰かに「授業の後でコーヒーを飲みませんか」と尋ねると、そのメッセージは“コーヒー”ではなくて関係のメッセージです。“雑談”は文化によって様々な形で行われます。「元気？」とか「どこに行くの？」とか「ご飯食べた？」など――しかしコンテクストにおいては、そのメッセージはほとんどが関係性についてです。「あなたがそこにいることに気が付いていますよ。私はフレンドリーですよ」ということを意味しています。私たちが第一言語として習得する言葉は関係性の表現が豊かにあります。外国語として学ぶ言語はしばしば「内容面のメッセージ」で、モノを対象にしたものが多いです。(例えば、「これはペンです」。)

“文化”や文化間コミュニケーションの中心は、非言語や言葉で表現されたメッセージによる関係面です。そして、もし、非言語メッセージと言語メッセージの「混同したメッセージ」が相反したものであれば、多くの人は自分の感情に従います。言葉よりも「大脳辺縁系（感じる脳)」に基づいて判断をするのです。

コミュニケーション論における次の考え方

は様々な見方をするのに役立つでしょう。“アナログ”的な表現と“デジタル”と言われる表現の違いです。“アナログ”と私が言うのは、表現の形が表現の意味するものに似ているというものです。日本では、お辞儀がアナログです。つまり、深くてより長いお辞儀はうわべだけのお辞儀よりも熱意のレベルの違いを意味しています。ある意味、漢字はそれが表すものに似ています。「“川”や“山”」は他の複雑な漢字よりも実物により類似していると言えるでしょう。アナログ式時計は“長針と短針”で、デジタル式時計は数字で、同じ目的である時を示します。しかし、この二つの表現には違う特徴があります。アナログ式時計は“読む”のがデジタル式時計よりも早いですが、デジタル式はより正確です。もっと重要なことは、アナログ式は関係性を示します。(「お昼近く」や「３時ちょっと過ぎ」とか、「５時半近く」などです。デジタル式時計ではそのような言い方はしないでしょう。)

単純化した特徴としては、非言語的な行動と関係面のメッセージはよりアナログで、言葉や内容面でのメッセージはデジタルと言えるでしょう。前者はより右脳で、デジタルメッセージは左脳で処理されます。

「技術」について

今日のデジタルテクノロジーが人間に及ぼすコミュニケーションや関係性への潜在的な影響を考えると、これらのことすべて関連性があるように思われます。ＧＰＳ技術（Ａ地点からＢ地点への経路をデジタルで示す）の前は、アナログ式で地図を描いていました。私は、日本人ほど地図を描くのに経験豊かで上手な人はいないと思います。地図を描くということ、また、読むということはＧＰＳに比べて、より一層コンテクストやその周囲の場所に注意を払うことになったのではないでしょうか。私たちが携帯やタブレット、コンピューターなどのメッセージを送ることに依存していくことで、何らかのスキルや非言語行動や反応が不可欠な対面式コミュニケーションに必要とされる感受性を失うのではないでしょうか。(日本では他のどこよりも“絵文字”が評価されて使われているということは重要です。絵文字は非言語表現ですし、感情のアナログ的な表現です。）人間のコミュニケーションにおいて技術が及ぼす影響について、著名な研究者であるシェリー・ターケルは、伝統的なコミュニケーションのやり方よりも、より速く単純で、関与の少ないデジタルメッセージの交換を好む傾向について憂慮をしています。祖母へ「ごめん。土曜日の夕食には行けない。」という短いメッセージを送る孫は、祖母に直接言う時（そして、彼女の反応を見る時）に必要な個人的な気配りや対人コミュニケーション能力が発達しないのではないでしょうか。

新しい技術は勢いを増した速度で出てきます。ホール先生は技術の変化の速度が我々の進化の過程において、人間が学習して適応していくよりもずっと早くなっていることを心配していました。これらは私たちの対人関係においてどのような長期的な影響を与えるのか、という問いかけには、あなた方の世代が最初に答えを見出してくれるでしょう。

講演するコンドン先生